

千刈狸の呟き

今までノンビリと狸穴に籠っていた《毛慰勞狸》です。何やら千刈狸として呟けとのことで、6月2日に発表された人口統計について、自分勝手に解釈していることを呟きたいと思った。籠っていた住所はあくまでも《タヌキアナ》であって、《狸穴》と書いて《マミアナ》と読む、かのロシア大使館のある所ではない。由利本荘市の、長閑な場所なのでご安心頂きたい。

さて先日、令和4年度の人口統計が報告され、合計特殊出生率が過去最低（平成17年と同率）の1.26であると、発表された。老狸にとって、少なくなった毛も抜けんばかりのショックだった。

合計特殊出生率（以下、合特）は言うまでもなく、15～49歳までの女性が一生の間に生む子供の数であり、2.0を割ると人口置換水準を下回るとされている。しかも、男女を混ぜた人数のことなので、将来の人口維持レベルの指標として不十分で、むしろ、一人の女性が一生の間に何人の女兒を生むかを表わす純再生産率に着目すべきではないだろうか。

さて、合特を経年的に見てみると、第一次ベビーブームの昭和24年には、年間240万人が誕生し、合特は4.54であった。その後下降するが、第二次ベビーブーム真只中の昭和48年では、209万人誕生・合特2.14を記録している。その後は出生数・合特とも下降し、遂に平成17年には、前述の合特最低値1.26となった。その後若干の回復の兆しはあるが、下降傾向のままで人口置換水準を大きく下回っており、このままでは日本の将来は暗澹たるものである。

そもそも、動物が卵を産み、植物が種を作るのは、その世代が終焉を迎えることを遺伝子レベルで伝えられ、次世代に遺伝子を残すためである。夥しい産卵をする生物は特に、産後すぐに絶命するのが一般的である。鳥類や哺乳類など一部では産後もある程度生存し続けるが、種別に寿命は概ね決まっている。では、人間は？日本人の平均寿命は、昭和20年頃には50歳を切っていた。しかし現在では（2021年統計）、女性87.45歳、男性81歳超と世界最高となった。食料需給、労働環境、住宅環境、医療環境など諸条件が整った一方、経済状況の改善、社会保障環境の充実により生命の維持・遺伝子の継代だけでなく、人生を楽しむ余裕ができたからである。

～ 出生率低下 ～

毛慰勞狸

少子化の要因としては、婚姻年齢の上昇、高学歴者による女性の社会進出の機会が増加、仕事を生き甲斐とする人が増えたこと、結婚後も夫婦だけの生活を重視する人が増えたこと。乳児死亡率が低下し、順調な成長が望めるようになったこと。子供の教育費増加が負担になっていること。戦争が無く生命の危機を感じないことなどが考えられる。

最近では《結婚適齢期》と言う言葉は死語になった感じがする。昭和50年代には、結婚後第1子を持つまでは約1.6年で、結婚・即ち出産が大方の経過であり、出産適齢期＝結婚適齢期であった。一方、年齢別出生率をみると、25～29歳では144.6だが、30～34歳では約75と半減し、40歳以降では6程度に激減する。以前は言われた、高齢出産に伴う様々な危険から〔○高〕と言う用語を聞かなくなって久しく思われる。その一方、老人施設内で老人達が、何回目かの結婚をしたと言うことも時々耳にする。つまり《結婚適齢期》は常にあるが、《出産適齢期》は限られていることを、私達は強く認識しなければならない。

子供のいない夫婦への調査では、不妊は別にして、教育費の高負担、高齢出産への不安、育児の肉体的・心理的負担、仕事への支障等が主な原因で、夫婦間の生活重視、どちらかが子供を望まない等もある。考え方は様々だが、《子を持って知る親の恩》とか、《負うた子に浅瀬》などの諺があるように、子育ては難儀ではあるが、子供により親の自分の人生も更に豊かになり、思慮深さも増すのではないだろうか。世間には、周辺に幼稚園などができると子供の声が目障りで、静かな生活が乱される等と不満を訴える人（達）も見られる。結婚を望まない人、子供を自分の生活の妨げと考える人達も、親から生まれてきたことを忘れてはいないだろうか？

次世代を担う子供が居ない生活は、SF小説にある未来都市のような不気味な世界となり、現実には確実に死に絶える寂しい世界になる。政府は、ばら撒きの子育て支援ではなく、財源も含め、抜本的な子育て支援対策を講じること。その一方受益者である私達も、子育て支援に関わる方々も、安心して自身が子供の居る生活の成り立つよう、考える必要がある。